FFGビジネス
コンサルティングの

ちょっと釣り道

［ 壱岐島 月光の巨アジ編 ］
Vol.18

連載2周年記念

月灯りに照らされて

「天の原 ふりさけみれば 春日なる 三笠の山に 出でし月かも」……この句も浮かぶ、とある月食の夜。そんな郷愁をもあまねく照らす青い月明かりにもの想う。季節風が吹き荒れ動力も無い時代に対馬海峡を越えようとした歴史の主人公に尊崇を。遣唐使、安倍仲麻呂や吉備真備らは闇夜を青く照らすこの月にどんな想いを馳せたのか。この青く照らされた月下に浮かぶ安定した島影は、遣唐使や防人の時代のさらに昔からも、大陸との海の交通の要衝として行き交う人々にどれだけ安堵や希望を与えてくれたことか。僅か20㎞程度の壱岐水道でも、沖合いでは島影はほとんど見えなくなることもあります。現在でさえそれ。そんな時、高度な航海技術も動力源もない時代、風力と潮流、人力を頼りに、この荒海を渡りきった人々の信念と胆力と勇気と探究心は、いかばかりであったろうか。

長崎県壱岐市のいきのしま。弊社はこの島の特徴を活かした地域振興の様々な案件をお預かりしています。晩秋の大潮、満月の青く輝く光は暗い海峡を煌々と照らし山肌を浮び上らせ、綾なす森の中にも降り注ぐ。永い歴史が刻まれ未来に向かっていく中、この月は変わらずあまたの人々や営みを照らしてくれたのでしょう。対馬海流がぶつかり、季節風が吹きつけるこの壱岐島は多種多様な魚

その後、私もデカいのやっつけときました（笑）

壱岐の朝焼け。巨アジの饗宴の終わり

朝霧に煙る港

毒がコワいミノカサゴ

ヒレがボロボロの巨大な回遊アジ

を育み釣り人の聖地と言われています。そして季節にもよりますが、50㎝を越える巨大なアジが大挙して押し寄せ、それを狙い撃てるところがあります。

雲ひとつない夜空を照らす満月が、数十年に一度の月食で欠けた夜。筆者はその島に向うフェリーに乗りこみました。その場所に、巨大なアジの群れが回遊してくるタイミングは、朝日が出る前と夕陽が沈む前の僅かな時間。その瞬間を狙うために全国からこの島には釣り人が押し寄せます。でも大自然が相手の釣り、実際には回遊してこないこともままあります。そこには灯りも無く、暗夜の中釣り人は、巨大アジが来るか来ないか運を天に預け竿を振り続けるのです。そして回遊があった場合でも、巨大化したアジはなかなか針をかけることができず、よしんばかけたとしても、強烈な暴れ方で針を外されたり、糸を引きちぎられたりします。獲れなかったとしてもその時の体験は釣り人を魅了してやみません。ふと思えば今日は大潮で満月。この強烈な月明かりはアジの回遊を妨げます。

たまたま釣り場に立てたその時間は午前4時半。潮が一番引いた時間帯の潮どまりに近く魚の気配は皆無です。諦めかけたその時、同行者が持つ竿に僅かな反応がありました。竿を立て魚の反応を見るとそれは一気に走り出します。それは恐らく手前側に走ってきたのか、始めはそんなに大きいとは思えませんでした。近くまで寄せて初めてそれは目覚めたように強烈な抵抗を見せ、手前に潜ろうとします。夜空が白み始める5時半頃それは網の中に入りました。40㎝を超えるマアジ。最大クラスではないですがそれでも目の当たりにすると「これがアジなの！」と驚嘆します。釣った本人は横たわるアジの大きさに声もでません。その引き締まった魚体の鰭々は長い海中の旅でボロボロです。我々も日々の生活に終われ、家族を養い社会の一員として生きています。このアジも自然界に生まれ落ち、外敵の脅威を避け、この大きさになるまで広い海の中を頑張って泳ぎ回り、命をつなぎ生きてきたのでしょう。そんな相手に畏敬の念すら感じます。今回、幸運は同行者に微笑み筆者には釣れませんでしたが、これでいいんだ。この地で、太古から希望を照らしてきた月明かりに包まれ、時に気まぐれな海に挑める時間を持てることが至福。魚との闘いを終えても体は火照ったまま。陽が昇り始め山の稜線がくっきりと浮かび始める時、北西の風が頬を冷やす。この風はこのまま、わたしの住む博多の方へ吹いていくのだろう。このひと時が久遠に続けばいいなぁ。そんなことを想いふと我に帰る。

この壱岐島の素晴らしさを発信していくことに協力できればと心に刻みながら。